「楽しい」だけじゃない
「身につく」「使える」「つながる」まで

THE WORLD STANDARD OF LANGUAGE ACQUISITION

親が与える
世界標準
の子ども英語

KAZUHO著

ただ聞かせる教材　英語漬けバイリンガリズム　塾任せの学習

LOGICCA
Kids English

SLAを学んでから
お子様に英語教育を
施してください！

出版　ロジッカ子ども英語

親が与える世界標準の子ども英語

Eigo-A-GoGo Kazuho 著

目次

はじめに.....5
1．SLA（第二言語習得）とは.....9
2．「聞かせるだけ」という罠に気をつけなさい.....13
3．年齢と言語習得に関する正しい知識を身につけましょう.....18
4．子どもに燃料を与え続けてください！.....23
おわりに.....27

はじめに

この冊子を手に取っていただきありがとうございます。わたしはEigo-A-GoGo という英語ファミリー向けコミュニティで運営を務める Kazuho と申します。

きっとこの冊子を読み始められたあなたはお子様の英語教育に興味があることでしょう。この冊子は子どもの英語教育の本質について知るため「第二言語習得（だいにげんごしゅうとく）」という分野の概論（がいろん）を説明しています。難しい単語や専門的な言い回しは分かりやすく解説していくつもりなので、あまり気張らず、まずは一度読み流すような気持ちで読んでくださいね。

まずはわたしの自己紹介をいたします。

わたしの名前は高田一穂（たかだかずほ）。東京生まれで、小学二年生の時に千葉県へ引っ越してきました。中学校までは英語に触れる機会はほとんどなく、小学校で不定期に開かれていた英語活動に参加するくらいでした。

わたしが最初に英語に興味を持ったのは、中学校の授業で教科書

に載っている英語の会話文を日本語に翻訳していたときでした。英語を日本語に変換(へんかん)するときの言い回しを自分で考えることがとても楽しかったのです。小学生の頃から小説を書いたりしていたので、言葉に興味があったのだと思います。

そんなことがキッカケで英語に興味を持ち、わたしは英語科のある県立高校に進学しました。そして入学直後、わたしの英語スイッチを入れる、ある素晴(すば)らしい機会をいただきます。

同じ高校の卒業生である知り合いが、彼の友人が開いたホームパーティーにわたしを招待してくれたのです。そこには日本に遊びに来ていたアメリカ人がいて、さらに英語堪能(たんのう)な女性が一人、そしてわたしのクラスメイトである帰国子女がいました。そこでみんなが楽しそうに英語で話している中で、わたしは愕然(がくぜん)としました。本当に、内容を全く理解できなかったのです。高校受験のために一生懸命単語や文法を覚えたのに、彼らの会話に入っていけない悔しさと惨(みじ)めさで胸がいっぱいになりました。

それからというもの、わたしはやるなら本気で英語を学ばなけれ

ばと一念発起し、ただ単語を覚えるだけでなく音声学やマイナーな文法知識なども身につけるよう努力しました。その甲斐あって、高校を卒業するまでにはTOEICで８００点弱、英検準一級を取得するまでに成長することができました。

その後、進学した大学で出会ったのがSLA（第二言語習得）です。この分野については詳しく説明しますが、この学問と出会ったときに「これこそ外国語を勉強する人たちが学ぶべき分野だ！」と思ったのを覚えています。わたしは児童向けの英語教育に関する講義も受

マレーシアに滞在したときのわたし
マレー語・中国語・英語の３ヶ国語を操る子ども達に感銘を受けた

けていたので、子どもの英語教育と SLA の結びつきを考えるようになりました。

大学卒業後は英語を使った接客業に携(たずさ)わるだけでなく、英語で漫画(まんが)を書いたり、英語学習にまつわる小説や解説本を出版したり、英語学習に関するブログ記事を書いたりと、様々な情報発信をしてきました。そして２０１８年春、子どもたちの英語教育にフォーカスし、真に効果的な英語教育を行なえる「ロジッカ子ども英語」を立ちあげました。そして２０２０年、オンラインで英語ファミリーと交流できる「Eigo-A-GoGo」というコミュニティを開始しました。

この冊子はまさに、子どもの英語教育に興味のあるパパママに向けて書かれたものです。子どもの正しい英語教育についての知識を取り入れながら、わたしたちの活動についても興味を持っていただけたら幸いです。ではまず SLA について解説していきましょう。

1．SLA（第二言語習得）とは

人はなぜ歩くのか考えたことはありますか。なぜ話すのでしょうか。

それらはあまりに自然なことなので、わたしたちは普段深く考えることをしません。しかし、それが自然にできない人がいる場合、人間がどのように歩くのか、どのように話すのかを研究することによって助けを与えられることがあります。

例えば怪我や先天的な異常でうまく歩行できない人に、どの体の部分を治療すればいいのか、どこを鍛えればいいのかなど専門家はアドバイスを与えます。それができるのは、専門家が「歩く」ことに関しての正しい知識を持ち合わせているからです。

「話す」ということも同じです。うまく話すことができない人がいる場合、それには原因があります。その原因を探り、突き止め、取り除く方法を見つけるのが言語の専門家の役割です。

歩けない人は「歩く」専門家の手を借りる

「外国語をうまく習得できないのには原因がある」

そう言われるとドキッとしませんか。実は、「外国語」つまり「第二言語」の習得についても先に挙げた例と同じようなことが言えるのです。中学や高校で英語に触れた大人達が英語を話せないのには原因があります。それを探り、突き止め、取り除く方法を知ることのできる研究が「SLA（第二言語習得）」です。

SLA とは Second（セカンド） Language（ランゲージ） Acquisition（アクイジション） の 略（りゃく） で、Second

Language（第二言語）を Acquisition（習得）することに関して研究する分野です。言語学や心理学などから言語習得について様々な仮説を立て、検証（けんしょう）を行い、集まったデータを元に効果的な外国語の勉強法を探る学問です。

これを学べば、大人だけでなく子どもに対しても効果的な英語教育を施すことができます。子どもは大人に比べて経験や知識の多様性が限られているため、効果がある教授法（きょうじゅほう）を見つけやすいからです。現代には様々な教材や勉強法、塾（じゅく）などが溢（あふ）れていますが、その中から本当に意味のあるものを選ぶことができるようになったら素晴（すば）らしいと思いませんか。親として正しく子どもの英語学習をサポートしたいと思いませんか。子どもが外国語（この冊子では英語に当てはめて考えてください）を習得する点で３つのポイント　１）「聞かせるだけという方法」２）「年齢と言語習得の関係」３）「動機（どうき）づけという名の燃料」を見ていきましょう。

復習のための質問

- 「歩く」ことができない人がいる場合、どのようにその人を助けますか。それは外国語を話すこととどう結びつけられますか。
- SLA とは何の略で、どのような学問ですか。
- 子どもを持つ親にとって SLA を学ぶ強みとは何ですか。

2．「聞かせるだけ」という罠に気をつけなさい

「これを聞いていれば英語がスラスラ出てくる」

「お子様にはとにかく英語の歌や話を聞かせましょう」

わたしたちは普段(ふだん)の生活の中で、このような宣伝をよく耳にします。聞き流すだけの大人向け英語教材や、観せるだけの子ども向けビデオ英語教材の広告をたくさん見てきたことでしょう。

そのような広告の中では教材を使って英語力が伸びたという大人や子どもが映し出されます。外国人と話したりしている様子もあるかもしれません。では、そのような広告が謳(うた)うように、聞いたり観たりするだけで言語を習得することは可能なのでしょうか。

Jacqueline Sachs ら(1981)が行なった子どもの言語発達の研究は興味深い事実を導き出しています。

ジムは耳の聞こえない両親を持つ健聴(けんちょう)の子どもで、音声言語の接触はほとんどがテレビでした。そして両親がジムに手話言語を使わ

ないという点で特異(とくい)な家族でした。

３歳９ヶ月の時点で、ジムは言語のあらゆる側面での年齢のレベルをはるかに下回っていました。非文法的な表現しかできなかったのです。

しかし、ジムが健聴(けんちょう)の大人との会話をするようになったところ、表現力が伸び始めました。４歳２ヶ月までには発話(はつわ)パターンはほぼ正常になり、年齢相応(そうおう)の言語になったのです。

他の人物との会話を始めてから言語習得が急速に進んだというこの事実は、相手が人間でないテレビやラジオなどのソースでは不十分(ふじゅうぶん)だったということを示しています。

つまり子どもは自分の理解のレベルに調節された言語（わかりやすく言い換(か)えてくれたり繰(く)り返してくれたりした言葉）と接し、自分が発話したときの大人の反応を見て、言語を習得していくのです。

また、Martha Trahey & Lydia White (1993)の「インプット洪水(こうずい)(Input Flood)」に関する研究も興味深い結果を示しています。

フランス語が母語の１０～１２歳の学習者たちに、２週間に渡り何百もの英文中の副詞を目にするように指示しました。指導は一切行われず、誤りの訂正もありません。

学習者は単に英語の文章を読み、それに基づく様々な理解のアクティビティを行いました。副詞が正しい位置にある文に頻繁に接することは確かに学習者にとってプラスにはなりましたが、学習は不完全という結果でした。多くの学習者がフランス語では自然だが英語では非文法的となる副詞の間違った使い方を見抜くことができなかったのです。

洪水のように正しい英語を浴びせられていたにも関わらず、最終的には習得が不完全だったという研究結果は、「読むだけ」「聞くだけ」という行為では言語は発達しないことを明らかにしています。

正しい言語でも聞いているだけでは習得できない　それはなぜか

では、言語を習得する点で子どもには何が必要なのでしょうか。

それは「交流（こうりゅう）」です。

大人から言われて分からなかったことを言い換（か）えてもらったり、繰（く）り返してもらったりして、子どもは言語を理解するようになります。また自分が発話したことへの大人の反応を見て、言語は正されていきます。そして何よりも会話することの楽しさを認識したときに、も

っと話したい、もっとうまく表現したいと動機(どうき)づけを得るようになるのです。

図書館などでの英語の無料イベントに参加したことはありますか。そこでは出演者との交流は行われていたでしょうか。

わたしたちロジッカ子ども英語は子ども達と交流しながら英語に接することのできるイベントやレッスンを提供しています。ただ聞かせたり見せたりすることはしないのです。

ご家庭で英語を使う際も、ぜひお子様との交流を大切にしてください。簡単なゲームでも大丈夫です。やりとりのないところに習得は生まれないのです。

復習のための質問

- 耳の聞こえない両親を持つジムの例は、「言語交流(げんごこうりゅう)」の大切さについて何を教えていますか。
- 「インプット洪水」とは何ですか。どんな実験が行われましたか。
- 「交流」することで言語力が伸びるのはなぜですか。

３．年齢と言語習得に関する正しい知識を身につけましょう

「The younger, the better（若ければ若いほどよい）」

わたしたちは何に関してもこの言葉を聞くことがあります。例えば「プロ棋士(きし)になるためには物心(ものごころ)ついた時から将棋(しょうぎ)で遊ばせる」とか「運動神経を良くするために早くからボールに触らせる」といったことを耳にします。

この理論は非常にもっともらしく聞こえます。あなた自身の経験に基(もと)づいて考えてみても、説得力があるのではないでしょうか。

では外国語を学ぶことに関しても、「若ければ若いほどよい」と言えるのでしょうか。これについて考える前にまず「臨界期(りんかいき)（Critical Period）」という言葉を定義(ていぎ)しましょう。

臨界期とは人間がある期間のうちに言語を習得するようにプログ

ラミングされているという仮説に基づく用語です。思春期(ししゅんき)あたりを臨界期とし、それを過ぎると言語習得がそれ以前と比べて困難(こんなん)になるという仮説です。幼年期に言語に触れなかった人間は、大人になってから完全に言語を習得することはできないとされています。

では、この臨界期は第二言語つまり外国語にも当てはまるのでしょうか。

「早ければ早いほどいい」というのは本当か

文法性に関する正確さという観点では、Jacqueline Johnson & Elissa Newport (1989)が行なった実験で、アメリカに移民した学生たちのうち、低い年齢から移民してきた学生たちほど文法テストで良い点を取ったことが明らかにされています。他の研究者のテストでも同じ結果が出ているため、確かに年齢と文法の習得は結びついているようです。

発音についてはかなり顕著(けんちょ)に違いが見られます。第二言語習得における研究のほとんどが、年長学習者には話し言葉においてそれとわかる「外国人なまり」が存在すると結論づけています。興味深いことに、新しい言語の発音パターンを習得する能力は文法性などと比べて、かなり早いうちに衰えるようです。

このような研究結果を考慮(こうりょ)に入れると、幼児期にすぐにでも英語を取り入れたいと思うことでしょう。しかしそれには注意が必要です。

Wallace Lambert(1987)は二つ目の言語を習得する過程で最初の言語を失うことを減算的(げんざんてき)バイリンガリズム(subtractive bilingualism)

と呼びました。あまりにも外国語ばかり取り入れて母国語から切り離されてしまうと、子どもの自尊心(じそんしん)に悪影響が出たり、家族との関係にも影響する可能性があります。まるで子どもがふたつの言語のはざまに落ちたかのようです。

より良いアプローチとされているのは加算的(かさんてき)バイリンガリズム(additive bilingualism)です。つまり外国語を勉強しつつ母国語も使い続けることを目指して努力することです。母国語での基礎的(きそてき)なコミュニケーション能力がつき、自尊心(じそんしん)が築(きず)かれていることを前提(ぜんてい)に、外国語を学ぶべきなのです。

年齢と言語習得は切っても切り離せない関係にあります。目標言語のネイティブ的な習熟が目標ならば、少しでも早い時期からその言語に接することが望ましいでしょう。しかし外国語を取り入れる際には、コミュニケーション能力などを母国語でも学ぶことが大切です。もし英会話スクールやインタナショナルスクールにお子様を通わせるつもりなら、無理な「英語縛(しば)り」などはせず、まずお子様とのより良い関係を築くことに集中してください。

復習のための質問

- 「臨界期」とはいつごろの期間のことを指しますか。
- 臨界期を境にして文法や発音の習得度はどのように変化しますか。
- 幼児バイリンガリズムで気をつけなければならないことは何ですか。

４．子どもに燃料を与え続けてください！

第二言語習得の分野は学習者自身の「やる気」の出どころ、つまり「動機(どうき)づけ」についても範囲(はんい)を伸ばしています。

動機づけは何を習得するにも重要なことです。暖炉(だんろ)で火を燃やし続けるには薪(まき)という燃料をくべ続けなくてはならないのと同様、行動し続けるには「動機」という燃料が常に必要です。では実際のところ、言語習得における「動機づけ」という燃料にはどのようなものがあるでしょうか。

やる気を燃え立たせ続けるには動機という燃料が必要

Robert Gardner & Wallace Lambert (1972) は道具的動機づけ(instrumental motivation)と統合的動機づけ(integrative motivation)という、外国語学習における２つの大きな要因を挙げています。前者は必要性があるから学習すること、後者は自己啓発や文化的な豊かさを求めて学習することを意味します。

例を挙げるならば、前者は「先生がテストを出した」ので学習すること、後者は「外国人とコミュニケーションがとれるようになりたい」ので学習することと説明できるでしょう。

ではどちらの動機づけのほうが、より学習者にとって適切なのでしょうか。

多くの人は後者の統合的動機づけがより良いと考えます。しかし、様々な研究によると、必ずしもそうではないということが明らかになっています。話さざるを得ない状況に置かれるといった道具的動機づけも、習熟を高めることがあるのです。近年ではどちらの要因にも着目し、動機づけの説明をしようという動きがあります。

親の立場にあるならば、この２つの動機づけを常に念頭に置いて

お子様をサポートしてください。子どもが「英語を話せるようになりたい！」と思えるように、興味を引く異文化交流の場を与えましょう。どんな些細(ささい)なことでも「褒(ほ)める」ことは大切なことです。達成感や満足感を覚えることで、子どもは「もっとやりたい」と思うようになるからです。

道具的動機づけを利用し、英語を話さなくてはならない場面に子どもを置いてみることもしましょう。過度にプレッシャーにならない程度で、英検などのテストを受けさせてもよいかもしれません。目標を持つことや目的を設定することに慣れている子どもは、自主的にレベルの高い言語学習にも挑戦(ちょうせん)していけます。

燃料を与え続けることと同じぐらい大切なのが、「英語を嫌いにさせない」ことです。子どもはひとたび嫌いになると、すぐには好きな状態に戻らなくなります。バラバラになった花瓶(かびん)を石膏(せっこう)で繋(つな)いでも完全に前の状態に戻らないように、英語と子どもの関係もひとたび砕けると恒久的(こうきゅうてき)な傷になることがあるのです。「褒める」ことを大切にし「どうしてできないの」といった否定的(ひていてき)な言葉を決して口にしないように気をつけてください。

どのような動機づけという燃料を与えればよいか迷ったときは、実際に言語を学習してきた人や、言語習得のプロに相談するのが最善でしょう。わたしたちロジッカ子ども英語も常に新しい学習法などを研究し、どのような感性（かんせい）を持った子どもを持つ親でもサポートしたいと願っています。

復習のための質問

- 言語習得における「燃料」とは何ですか。
- 動機づけには大きく分けて２つのどのような要因がありますか。それを用いたどのようなサポートがありますか。
- 燃料を与え続けるのと同じくらい気をつけなければならないのはどんなことですか。

おわりに

　様々な教材や塾が溢れているこの世の中において、外国語習得の根幹(こんかん)を理解するのは非常に重要なことです。さもないと効果のない空(くう)を打つような学習を子どもにさせてしまう危険性があるからです。

　多くの言語学者は、子どもに外国語を「コミュニケーションのツール」として気づかせることの重要性を認めています。ただ聞くだけ、繰(く)り返すだけの言葉は本当の意味で言語ではありません。この点で、子どもが気軽に英語をコミュニケーションツールとして使える環境はどこでしょうか。

　それは家庭です。

　わたしは中学生の家庭教師を受け持っていたとき、週一だけのレッスンでは到底(とうてい)足りないと感じていました。週に一回顔を合わせるだけでは、どうしても生徒のやる気を持続(じぞく)させることができないのです。

それでもわたしの教え子たちが志望校に見事合格し、目標を持って勉強を続けられたのはなぜでしょうか。

それは親子のコミュニケーションがあったからです。

わたしは毎回レッスンのたびに親御さんと顔を合わせ、たわいもない話からお子さんを励まし続けるよう促しました。わたしが生徒のよいところを褒めると、親御さんも大抵つられて生徒の良い点に気づくようでした。そのように親御さんの協力意識があったからこそ、子どもも受験勉強を続けられたのです。

「英語のレッスンに通わせているけど、うちの子、全然話せるようにならないわ」

そんな言葉をよく耳にします。もちろん、お金を払って通わせているからにはスクールに期待する気持ちも理解できます。しかし、そう言っている親自身はどうでしょうか。次のように自問してください。

「わたしは子どものために家庭での英語学習の環境づくりを行なっているだろうか。子どもの小さな変化に気づいて褒めているだろうか。簡単な英会話ができるよう、自分自身も勉強しているだろうか」

子どもにとって家庭は最善の学びの場となる

わたしは子どもの英語学習には家庭を巻(ま)き込んだ総合的な学習環境づくりが大切だと考えています。ですからわたしが運営する Eigo-A-GoGo ではパパママがお子様と一緒に英語を楽しめるよう、親子参加型のイベントやパパママ向けの英語講座を開催しています。

あなたも親子で手を取り、英語という言語に向き合ってみませんか。ただ「身につく」だけでない「未来につながる」学習を、一緒に見つけましょう。世界に羽(は)ばたくお子様のイメージをしっかりと描(えが)き、楽しいおうち英語ライフを過ごしていけますように。

Eigo-A-GoGo

高田一穂

Copyright 2020 -Eigo-A-GoGo. All Rights Reserved.